

オーダーメイドの検診プログラムで 予防医学を実践

ん、食道がん、胃がん、大腸がんなどのがん10種と2型糖尿病、高血圧、非アルコール性脂肪性肝疾患（NASH）、関節リウマチなど20種の約30疾患を検査の対象にしている。さらに血圧や血糖値、コレステロール値などの検査値に対する遺伝傾向、ワーファリンの必要内服量など薬剤応答性などを加えて計50項目について、遺伝子的なリスク診断を行う。

健康管理ゲノム情報は、こうした疾患や遺伝的傾向に関するDNAマーカーに基づいて、個人のDNA情報を解析。そこからリスクを判断する。さらに、学内の専門医集団が作り出したリスク疾患を回避する方法を提案し、病気を未然に防げるよう手助けする。

重要なポイントは、遺伝健康管理ゲノム情報やリスク疾患回避法を提供するだけで終わらせないことだ。一般の人には理解しにくい部分も多い遺伝子解析結果を、できるだけ丁寧に説明・カウンセリングして、栄養指導や生活習慣指導を行う。予防医療に役立ててもらうためだ。

さらに、リスクに応じた検診メニューを組み立てるなど、検査後もしっかりとフォローしていく。受診者の中には、長年血糖値が高いと言われていたものの生活習慣の改善に

疾病予防・早期発見につながる厳選された検査項目

約50項目	がんリスク(約10種) 乳がん(女性のみ)、肺がん、食道がん、胃がん、大腸がん、前立腺がん(男性のみ) など	約30疾患
	生活習慣病・その他疾患リスク(約20種) 2型糖尿病、高血圧、心疾患、非アルコール性脂肪性肝疾患、パセドウ病、関節リウマチなど	
	検査値に対する遺伝傾向 血圧、血糖値(HbA1c)、コレステロール値など	
	薬剤応答性 ワーファリンの必要内服量、カルバマゼピンの副作用など	

至らず、ゲノム情報で疾患リスクを示されたことで行動変容を促すことができたという人もいる。

このようなフォロー体制について、センター長の石川欽也教授は、同センターならではの強みの1つだと説明する。

「このセンターでは、検査の流れや受診者の対応に関する画一的なマニュアルを作成していません。それは、人によって検査すべき項目や検診に求めるものが違うからです。ここでは個人の希望によって検査項目を組み立てますし、ゲノム情報によって検査頻度や追加検査項目を変えられることが多々あります。そのように一人ひとりのニーズに合わせた対応ができることから、当センターが評価されているのだと思います」

**海外受診者の受け入れなど
さらにプログラムを充実**

センターがオープンして、間もなく2年がたつ。この間、予想していた以上に受診会員が増えた。

「大学病院は保険医療機関なので、保険外診療である検診事業については積極的に宣伝することができません。それでも徐々に評判が広がり、最近では毎週数人の個人会員の申し込みがありますし、法人会員も6社

を上限としていたところ、すでに5社になりました。評価ポイントとしては、ゲノム情報提供に加えて、大学病院の専門医による検査や診察を受けられる点が大きいようです」(石川センター長)

センター開設当初は、受診者に向けた告知だけでなく、院内に周知してもらうことも課題の1つだった。それが準備段階から約3年たった今では、院内での認知度がかなり高くなり、センターから各診療科への引き継ぎもスムーズに行えるようになった。

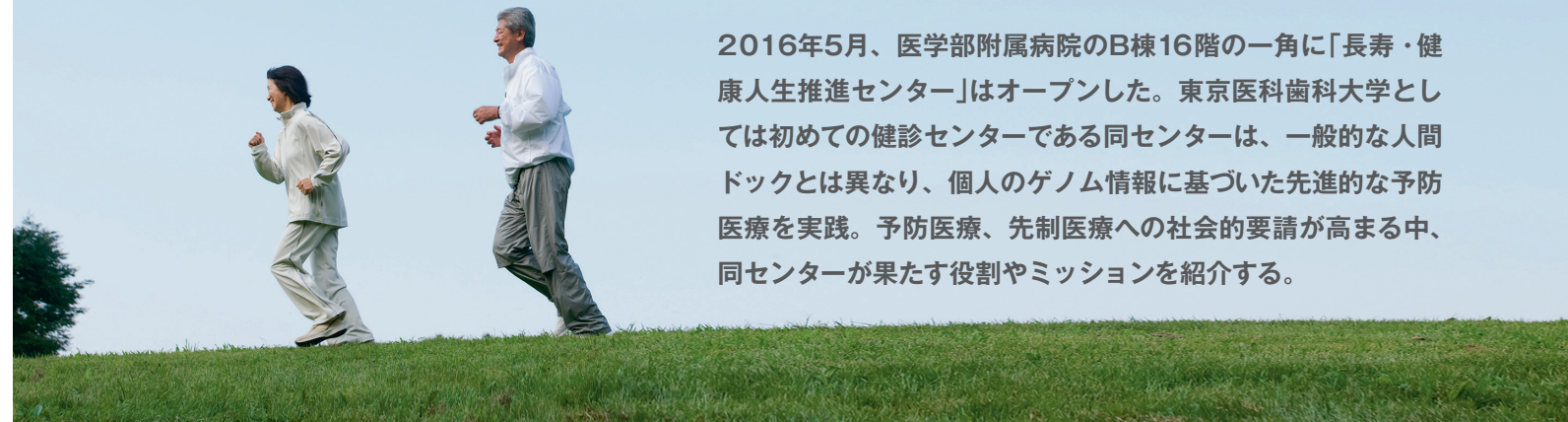
最近では、アジア圏を中心とした海外からの問い合わせも増えており、海外受診者の受け入れ準備をしている。ただし、ゆったりとした雰囲気の中、リラックスして検査を受けられることがこのセンターの良さでもあるので、受診者を極端に増やそうとはせず、プログラムの質を高めることを目指すという。

「トイレ付きの個室で前処置を行って内視鏡検査を行える環境や、高い技術を持つ専門医が先端の検査機器を使って丁寧な検査をすることなど、今のセンターの良さを失わず、プログラム全体を充実させていきたいと考えています」(石川センター長)

オーダーメイドの 検診プログラムで 予防医学を実践

長寿・健康人生推進センター

2016年5月、医学部附属病院のB棟16階の一角に「長寿・健康人生推進センター」はオープンした。東京医科歯科大学としては初めての健診センターである同センターは、一般的な人間ドックとは異なり、個人のゲノム情報に基づいた先進的な予防医療を実践。予防医療、先制医療への社会的要請が高まる中、同センターが果たす役割やミッションを紹介する。



写真：渡辺正和/アフロ

「健康で長生き」は、誰もが望むこと。ところが現実には、超高齢化社会が進む一方で生活習慣病やがん、認知症の罹患者は増え、日本の医療費も拡大し続けている。

そのような中、社会的要請が強く、国の重要課題の1つとしてあげられているのが「予防医療」だ。従来の医療は病気に罹ってから治すものだが、健康なうちから医療的介入を行い、病気にならないようにするという考え方で、高騰し続ける医療費抑制に繋がるとして期待度が高い。

特に、生活習慣病は食事や喫煙などの生活習慣を変えることで予防効果が高まることから、メタボ健診などの集団健診が積極的に行われてきた。

東京医科歯科大学医学部附属病院の長寿・健康人生推進センターは、先進的な検査体制を構築し、予防医療の一歩先にある先制医療にも生かせるような健診を実践している。文字通り、健康な長寿人生を送れるよう、受診者に寄り添うセンターを目指す。

疾患リスクを推定する 健康管理ゲノム情報

同センターは、心臓、肺、食道・胃、大腸、泌尿器、脳、視覚・聴覚の検

診、PET・CTによる全身がん検診、女性専用がん検診を行う。その他に、睡眠検診、運動器検診、歯科ドックといった一般的な健診センターではあまり行われていないような検診メニューもある。

さらに大きな特徴として、がんや生活習慣病などの多因子遺伝性疾患のリスクを推定する「健康管理ゲノム情報」の提供という独自のプログラムを実施している。このプログラムは疾患バイオリソースセンターと共同で開発したもので、採取した血液から遺伝子解析を行い、罹患するリスクの高い病気や体質について情報を提供する。

対象となる疾患は、乳がん、肺が

石川欽也 教授

東京医科歯科大学医学部附属病院
長寿・健康人生推進センター長



オーダーメイドの検診プログラムで 予防医学を実践

一日のみの検査(エッセンシャルコース)のスケジュール



レントゲン室も備えた歯科診察室。個室でゆったりと検査を受けられる。



広くてゆったりとした雰囲気の内視鏡室。専門医による熟練した技術により検査の負担が少ない。



車椅子対応トイレを完備した個室は、内視鏡検査の前処置でも他の人を気にせずに過ごせる。

エッセンシャルコース	
8:15	受付
8:30	採尿・医師診察
9:00	眼科
9:30	レントゲン 胸CT 骨盤・腹部MRI 頭部MRI
10:00	
10:30	
11:00	腹部エコー
11:30	身体測定・内視鏡説明
12:00	更衣→採血→胃カメラ
12:30	
13:00	安静の後 内視鏡結果説明
13:30	
14:00	昼食
14:30	
15:00	心エコー 心電図・肺活量
15:30	
16:00	歯科診察
16:30	聴覚検査
17:00	医師より結果説明
17:30	帰宅

検査結果は、判明した分の説明が当日にあり、残りは自宅に送付される。

長 寿・健康人生推進センターの検査プログラムは、健康管理ゲノム情報の提供プログラム、がんスクリーニングPET検査、食道・胃・十二指腸内視鏡検査、歯科検査といった総合的な健診を年2〜4回に分けて行う「基本プログラム」が中心。しかし、何日かかる検査では負担が大きいという人のために、1日で全ての検査が終わるコースも新設した。この他、重点的に検査を受けたい人に対して、大腸内視鏡検査(大腸ファイバー、カプセル内視鏡、ダブルバルーン内視鏡)などの個別プログラムを用意している。

内視鏡や歯科検査は医学部付属病院B棟16階のセンター内で受診することが可能で、前処置や次の検査までの待ち時間は、静かでゆったりとした個室で過ごすことができる。CTやMRI、PETなどは病院内の各診療科に行って検査を受けることになるが、スタッフが同行して案内する。

検査の結果、診療が必要だと判断されれば学内の専門医へ紹介し、特に異常が見つからなければ疾患リスクにもとづいた予防対策をフォローする。次回の健診では、この検査結果をふまえて重点的に診るべきポイントを押さえた検査項目が組み立てられるという一連の流れになっている。

B

専任スタッフが語るセンターの特色

長寿・健康人生推進センターには、内科・神経内科医である石川欽也センター長をはじめとした専任スタッフが常勤している。そこで、専任スタッフから見たセンターについて、それぞれの立場から特色を聞いた。

副センター長の荒木昭博准教授は、

自ら内視鏡検査を行うほか、腹部エコーなどの検査結果のチェック、検査結果の説明などを行う。受診者からは、ベテラン消化器内科医である荒木准教授に内視鏡検査をしてもらえると好評だ。荒木准教授自身も、同センターの専任になってから、医師としてのスキルの幅が広がったことを実感しているという。

「ここでは一般的な健診センターとは異なり、心臓弁膜症などの合併リスクのある患者さんについても積極的に診ますので、他科の専門医から意見を聞く機会が多いのです。また、様々な診療科の協力により検査



副センター長
荒木昭博准教授



歯科医師
原田直子助教

を実施しているお陰で他科のことが分かるようになり、大変勉強になっています。本学はもともと診療科同士の横の繋がりが強い大学です。センターがハブとなって、より強固な関係が築けていると感じています」

検査や連携の体制を整えるため、独自のカルテシステムを構築中だと話す荒木准教授。センターのプログラムについて「私たちは会員一人ひとりの主治医としてじっくり話を聞いて健康生活をサポートしていきますので、保険診療では満足できない人はぜひ利用してください」と薦める。

歯科医師の原田直子助教は、歯科ドックを担当。センター内の歯科診察室での検査・診察に加えて、医学部附属病院A棟16階の特別室に入院している患者さんに対して、歯科衛生士とともに往診での口腔ケアサービスも行う。

「全身疾患と歯周病の関連が明らかにするなど、全身の健康にとって

口腔環境を良好に保つことはとても大切です。そこでこのセンターでは、全人的医療の一環として口腔内をチェックしています。歯やお口の困りごとがあれば、検査以外のことも相談に乗ります」

歯科ドックでは、歯学部附属病院の歯科衛生士による磨き残しチェックなども行う。また、歯ぐきしりや顎関節症状のある受診者に対しては、マウスピースの作製や、セルフマネジメントについてアドバイスをすることもあるという。歯科治療が必要な場合には、歯学部附属病院受診の案内も行っている。

今後に向けては、受診者の要望も聞きながら診察内容を工夫していきたいと原田助教は話す。

「口腔内トラブルを感じていない人でも、自分のお口の中の状態を知ることとはとても重要ですから、歯科ドックを活用してもらえればと思います」



看護師
磯部和美副看護師長

副看護師長の磯部和美さんは、健診を受けに来た人の検査スケジュールの調整、個室の整備など、検査全体がスムーズに進むように環境整備を担当している。また、後からフォローができるよう、検査後の検査結果説明の席に同席することもある。

「このセンターに勤務する前は長く病棟に勤務していたので、疾患が見つかる前の人に対してどう接していいかわからず、不安に感じることもありました。今では健診を受ける人が心配なことに配慮した対応をするよう心掛けています」

病院の患者さんとは異なり、会員への対応ではちょっとした言葉遣いや受け答えにも気を使う。そういった注意点をほかのスタッフと共有し、チェックすることも磯部さんの仕事の1つだ。

今後は、様々なバックグラウンドや疾患リスクを持つ会員のため、知識の幅を広げていきたいと話す。

「病棟看護師の頃は特定の疾患については勉強していましたが、ここでは幅広い知識が必要です。特に、栄養や生活習慣に関係することなど、健康について一般的な知識を身につけたいと思います。そして、ゆったりと検査を受けてもらえるようなセンター作りを進めていきます」